

Title	<書評> Johann P. Arnason, "Social Theory And Japanese Experience : The Dual Civilization", Kegan Paul International, 1997
Author(s)	福野, 明子
Citation	年報人間科学. 19 P. 303-P. 307
Issue Date	1998
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/7948">https://doi.org/10.18910/7948</a>
DOI	10.18910/7948
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

Johann P. Arnason

*Social Theory and Japanese Experience*  
— *The Dual Civilization*

Kegan Paul International, 1997

福野明子

著者、J.P. アルナソンは、アイスランド出身で、日本での知名度こそ低いが、現在世界的に重要な社会理論研究者の一人である。彼はプラハ大学で学んだ後、フランクフルト大学でハーバーマスの指導を受けて博士号を取得し、その後マックス・プランク社会研究所の客員研究員を経て、現在はオーストラリアのラトローフ大学（メルボルン）の教授である。彼には、プラクシス概念を核としてウェーバー解釈を試みた『*Praxis und Interpretation* (Suhrkamp 刊)』という著作がある。その他にも彼は、N. エリアスの方法論についての論文『*Figurational Sociology as a Counter-Paradigm*』 (*Theory, Culture & Society*, 4:429-56 掲載)や、日本におけるポストモダンについての共著 *Japanese Encounter of Postmodernity* (Kegan Paul International 刊) などを著しており、この『社会理論と日本の経験——二元的文明としての日本』は、これらの研究を引き続き展開したものである。

これまで日本は、遅れて近代化を目指す国々にとつての模倣すべきモデルとなる、「非西洋社会で唯一西洋型の近代化を成し遂げた」地域として、「オリエントとオクシデント」という二分法に疑いを投げかける「特異な存在と見なされてきた。この注目度の高さに比べて、日本の軌跡についての理論的検証が不十分だと感じる著者は、多義的なタイトルからも予想される通り、社会理論でこれまでになされた主な研究を参照しつつ、日本の軌跡をたどることによってその欠落を埋めようと試みる。

この本で著者は、七世紀から現代に至るまでの、一三〇〇年間を

扱う。著者は便宜上この長いスパンを、I原始的な社会から国家が出現するまでの一次的国家形成（七世紀の「十七条憲法」や大化の改新、鎌倉前夜）、II初期国家の分解後に新たな封建国家が再構築されるまでの二次的国家形成（鎌倉時代、江戸前夜）、III近代の胎動期（江戸時代）、IV近代（幕末、現代）の四つに分け、権力と文化の相互作用を中心に、日本の近代の特徴とその歴史的背景を分析している。

まず著者は、M.ウェーバーによってなされた古典的研究の検証から出発する。

ウェーバーの近代化論は、おおむね今なお通用する、示唆に富んだ研究である。とはいえ近年では、この先行研究を踏まえた上で、ウェーバー自身が指摘してはいたものの掘り下げることが出来なかった問題領域に取り組みとする、意欲的な動きが展開されている。

ウェーバーが積み残した問題とは、いわゆる「西洋問題」であり、近代に内在する問題を分析することである。ウェーバーは、『宗教社会学論集』序言の冒頭で「一体どのような諸事情の連鎖で、他ならぬ西洋という地盤においてのみ、普遍的な意義と妥当性を持つような発展傾向を取る文化的諸現象——少なくとも我々はそう考えたがるのだが——が現れたのか」と問いかける。そして彼は、近代における合理化の進展に伴って、物事の価値や意義が失われ、人間が物象化されていく問題を示唆している。

これらの問題への取り組みとして、いわゆる「西洋」以外の、すなわち欧米先進地域以外の所では、どのような道筋を経て近代化が

進んできたのかを、比較分析しようとする動きが起きた。「ポスト・ウェーバー的アプローチ」と総称されるこれらの模索は、近代の多様な道筋と、それら相互の関わり合いに関心を向け、同時に、近代がはらむ問題を浮き彫りにしようとしている。著者もまた、この（アプローチを取る一人として、近代の多様な道筋という問いが、「日本の経験について理論的に解釈する際の、最もはっきりした出発点」と述べている。

「文化と権力の相互作用を、その地域で起こる合理化と文明化の過程の背景として」立論しようと試みる著者にとって、ウェーバーの研究は、この問題領域に先鞭をつけたものである。その研究は、当該文化の特殊性の前提を、儒教やその他の宗教的要素に求めており、著者はこの立場を文化主義的アプローチと呼ぶ。

ただし、本文中に「ウェーバーは文明モデルを宗教的伝統と同一視する過ちを犯した」という記述されていることから伺えるように、著者はあくまでウェーバーに対して批判的である。この本にも、例えば、外来の仏教と神道という土着宗教の結びつき方（シンクレティズム）の分析が織り込まれているが、これなどはウェーバーを批判的に受け継いだものと言えよう。

そして著者は、文化主義的アプローチに加えて、近代化の起源として国家形成の過程をたどり、官僚制化やエリートの文明化を重視する、歴史主義的アプローチを相互補完的に用いることによって、ウェーバーを乗り越えようと試みる。歴史主義的アプローチという際に、著者が特に念頭においているのは、エリアスによる、文明化

の過程についての理論である。

著者によれば、エリアスの議論は、中世から近世初期における国家形成過程に焦点を当てて、「権力構造の変化や、その変化が自己抑制の様式とメンタリティーに及ぼしたインパクト、及び国家形成の原動力」を詳細に分析したものである。エリアスは、国家的に組織された社会の生成とそこに見られる人間関係の力学を、「誰にも計画されず意図されてもいなかったけれども、同時に多くの個人の意図と行動から生まれた (Elias: 1939)」ものとして分析した。彼の分析では、このような人々の相互関係——彼自身は「編み合わせ (Verflechtung)」という言葉を使っているのだが——が、重要な位置を占めている。

また、エリアスは、「日本において、人々の封建的な結びつき方や制度を生み出した編み合わせは、その材料に注目すると、ヨーロッパの封建時代に作られた構造や編み合わせと、実によく似ている (Elias: 1939)」と述べて、日本研究の糸口を提示したが、彼自身はこの比較を果たせなかった。

著者は、明らかにエリアスの方法論から、大きな影響を受けている。この本を通して描かれるのは、日本における国家的に組織された社会の生成と背景としての文化的状況であり、とりわけ、「神聖な権威」あるいはイデオロギー的中心としての天皇システムと、実質的な権力を握る摂関家や武士および官僚たちとの間の、バランス関係の変遷である。つまり、この本で展開される議論は、「国家形成の過程とその社会的細分化」および「その文化的状況の重要性」を

テーマとし、社会構造の比較的安定した要素と変動していく要素を手がかりにして、権力と文化の相互作用に焦点を置く文明化論を構築しようとする試みなのである。

この本の中でも特に、エリアスの方法論の影響が色濃く見られるのは、近代の胎動期として最も比重を置かれている江戸時代についての分析である。かつてエリアスは、とりわけ『宮廷社会』の中で、絶対王政期の国王は、決して絶対的かつ強大な権力を掌握していたのではなくて、競合する宮廷貴族と市民階層の緊張関係を、どちらも決定的な優位を勝ち取れないように操ることによって自らの地位を保っていたのだと指摘した。つまり、どれ一つとして極端に弱体化しても強大化しても困るといふ、この三者の持ちつ持たれつ相互依存関係によって、社会体制の安定が維持されていたというのである。この本の中で著者もまた、例えば江戸幕府によって作り上げられた幕藩体制の巧妙さを、鮮やかに浮き彫りにして見せる。

一般には、幕藩体制は中央集権体制とされている。しかし、幕府は、軍事力も租税も独占しておらず、統一された官僚装置も持っていなかった。幕府は、士農工商という身分制度を作り、加えて、支配層をさらに内部の権威のヒエラルキーに組み込むことによって、自らを最上層部に位置つけたのである。一方で幕府は、鎖国政策によって、対外貿易の利益だけでなく外国との接触をも独占し、体制の微妙なバランスにとつての潜在的な脅威をコントロールした。諸藩の側も、体制を覆そうとするよりは、争って自藩の収益を拡大することに力を注いだ。従って著者の分析によれば、当時の国家構造

は、脱中央集権化されているにも関わらず、安定した緩やかなパランスが保たれ、その上に幕府が成り立つという、実に巧妙なものだったというのである。

この時期から、都市部を中心として、市場経済と商人階層が著しく成長し、土地から切り離された武士階層は、やがて明治以後、官僚エリートに移行していくことになる。著者は、封建的ヒエラルキーが非人格的で官僚的な性格を持っていたことが、明治以降の国民国家に対する忠誠を先取りしていると指摘する。著者は、この時期に形成された武士に代表されるメンタリティーとして「敬意を表する個人主義 (honorific individualism : Ikegami ; 1995)」を指摘し、これが天皇システムと結び付けられたことが、日本の近代に至る道筋で大きな役割を果たしたと考える。さらに著者は、近代日本における帝國的拡張と経済成長の密接なつながりを丹念に描写し、近代日本の帝国主義的段階とその後の経済大国としての発展の間に共通する背景を示唆している。

著者は、天皇システムや近現代史を議論する際に、天皇をタブー視もしなければ崇拜もしない。この醒めた外からの視点によって著者は、日本人研究者に時折見られる感情的なバイアスを免れており、このシステムが持つ歴史上の機能を切り出すことに成功している。

日本の場合、一次的国家形成は天皇親政モデルに基づいており、この時期に、文化的ヒエラルキーの頂点かつ正当性の源泉としての天皇像が確立し、「支配者と臣民の間の疑似家族的な関係という虚構」が作られた。そしてこの虚構は、律令国家が崩壊して、天皇の

権威と世俗権力が分離した後も、必要に応じて時折引き合いに出され、民衆の不満の爆発という潜在的な脅威から中央を守ることにあった。著者によれば、朝廷が権力を失ってからも、なお高い文化的威信を持ち、文明の象徴でありつづけるというこの二元的な布置に日本の特徴が現れているという。

二元的な布置が見られるのは、政治に関してだけではない。日本は、かつて大陸の中国文明から、帝国という政治モデルおよび仏教や儒教、多様な農業技術や学問芸術などを導入し、やがては西洋先進国からも、同様に積極的な文化借用をした。ただし、これらは決して一方的な吸収ではなくて、適宜修正を伴う選択的な受容だったし、反動として日本独自の伝統と称されるものが頻繁に強調されたりもした。著者は、「日本は歴史的に、宗教や政治・経済組織の合理化と共に、パティキュラリズムの統合と理想化を経験してきた」と指摘する。著者の詳細な記述から、「無傷のままの固有の伝統」という想定を背景に、積極的な文化借用と、それに伴って引き起こされた混乱の中和剤としてのパティキュラリズムの間を行き来する日本、という図式が浮かび上がってくる。

このように著者は、この本全体を貫く柱として、日本の軌跡における「二元性」の現れ方を重視する。つまり、権力面では、権威（主に天皇）と権力（摂関家・院・將軍など）が分離したまま併存する二元的な政治が、そして文化面では、開国と鎖国、あるいは、積極的な文化借用とパティキュラリズムの高揚という二元的な態度が現れて相互作用しあうという、これら二元性の絡み合い方そのものが、

日本の特徴だというのである。

これまで、内外からの日本分析の多くが、日本を前近代的なものを引きずった遅れた国だと批判する場合であれ、日本型システムのある程度の成功を賛美する場合であれ、日本を際立って異質な特殊事例とする見方を前提としてきた。そのような分析では往々にして、分析者が「突出して異質な日本」の比較的理解しやすいその他の世界（ただし、主に欧米先進国に限定されている）という二項対立に囚われてしまい、実態の分析もそこそこに、根拠が不確かなステレオタイプ化された認識だけに基づいて、自他の類似と差異を結論づける傾向が見受けられる。

これに対して著者はこの本で、日本における二元性の現れ方を一貫して重視するだけでなく、ヨーロッパ諸国や中国・ソヴィエトなどの、他の社会についての分析を参照することによって、日本なるものを実体化することなく、その特徴を浮き彫りにしている。結果としてこの本は、日本（文化）論にしばしば見られる、日本文化には固有かつ不変の本質があるという想定を解体することになり、「西洋と東洋」という二項対立に基づいた日本特殊論からは一線を画している。

ここで日本の現況を省みると、政治経済の不透明性や戦後処理の在り方などについて、多くの地域から日本に対する違和感が表明されている。しかし国内では、「戦後五〇年」という一つのピリオドと、新時代の幕開けが否応なく迫っているとする慌ただしい雰囲気、近世が抱える問題の多くは、あたかも過去の物であるか

のように、心なしか影が薄い。

このような状況に際して、歴史的背景を重視しつつ、進行中の近代という観点から、日本を分析しようとする試みはこの本の意義は、非常に大きいというべきであろう。従ってこの本は、著者が特に想定している「日本を対象としている社会思想の研究者や、日本の歴史・文化・社会の研究者」などの読者層にとっては、おそらく挑発的で示唆に富んだ一冊だと思われる。

ただし、著者は別のところでエリ阿斯を「文化と権力の相互作用をテーマとしていながら、権力面を偏重した」と批判しているが、ここでの著者の分析からは、エリアスの著作とは違って、各自の思惑に沿って動く人々の粒が、なかなか見えてこない。そのために、その都度の歴史的状況に応じた、特に文化面の分析が、時として多少抽象的すぎる感否めない。加えて、日本における近代の歴史的背景を分析する際に、一三〇〇年間の長いタイムスパンを取ったことが、果たして適切だったかどうかについての検証が、課題として積み残されているように思われる。

Elias, Norbert: 1939 *Über den Prozeß der Zivilisation* (『文明化の過程』)

上・下。法政大学出版局)

Eiko, Ikegami: 1995 *The Taming of the Samurai — Honorific Individualism and the Making of Modern Japan* (Harvard University Press)